

楽しみと発見のある毎日を

Saijo

広報さいじょう

2019

6

Let's enjoy our life in Saijo!

時代を創る

松木さん、佐伯さんが遺したもの

LOVE SAIJO

時代を創る

松木さん、佐伯さんが遺したもの

松木幹一郎に佐伯勇。この名前を聞いたことはありますか。

今年ちょうど、松木は没後80年、佐伯は没後30年。

彼らは西条市出身で、明治・大正・昭和の日本を牽引けんいんしたリーダー。

平成から令和を迎えた今、改めて西条市出身の偉人の生き方を振り返ります。



台湾電力の父

まつきかんいちろう
松木幹一郎 (1872 ~ 1939)

河原津出身。東京帝大卒業後、鉄道院理事、台湾電力(株)社長などを歴任。当時アジア最大の発電量となる水力発電所を台湾の日月潭に完成させ、台湾の電化に尽力した功績から「台湾電力の父」と呼ばれている。



日本最大の私鉄に

近鉄中興の祖

さえき いさむ
佐伯 勇 (1903 ~ 1989)

丹原町長野出身。東京帝大卒業後、大阪電気軌道(株)（現在の近鉄）に入社。社長就任後は、G7サミットが行われた「志摩観光ホテル」、世界初の2階建て電車・ビスタカーを誕生させるなど、近鉄を日本最大の私鉄に育て上げた。

台湾との懸け橋

タピオカミルクティーが大流行し、日本人の人気旅行先の台湾。7月には松山からの直行便も就航し、皆さんにとって身近な海外ではないでしょうか。

その台湾の工業と経済の発展基礎を築いたのが、松木幹一郎。1895年からの約50年間、台湾は日本の統治下にありました。松木は日本政府に求められ台湾電力の社長に就任。台湾最大の湖「日月潭」に当時アジア最大

松木は、東京帝国大学法科大学（現在の東京大学）を卒業後、郵便・交通・通信・電気などを担当する通信省に入省。郵便部門に配属され、日本の近代郵便制度の立ち上げと運営に関わりました。

その後、鉄道部門に移り、駅係員や車掌を管理する責任者となりました。異動の翌年、鉄道部門が国有化され鉄道院（のち

の水力発電所を築き、台湾全土へ電気を供給することが急務でした。しかし、第一次世界大戦や関東大震災によって資金が調達できず、工事は中断。松木は、権威ある専門家を集め、徹底的に再調査を行い、工事計画を見直しました。資金調達に駆け回り、台湾総督府などと交渉を続け、海外からも借金をして、工事を再開。その結果、第一・第二水力発電所を完成させ、台湾

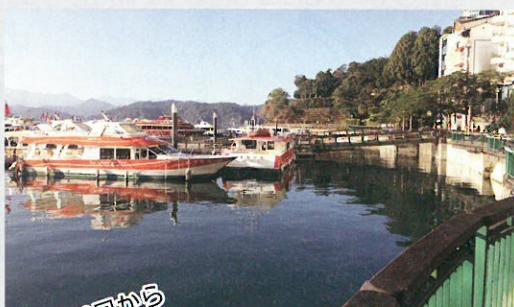
の日本国有鉄道）となり、総裁官房秘書課長に就任。この人事は、通信大臣・初代鉄道院総裁の後藤新平が、特に信頼を寄せていた松木の手腕を認めたものでした。組織が一本化された鉄道院での主な仕事は人事行政。大規模な人事整理を行い、約1100人をリストラすると同時に、若く才能ある者を積極的に採用。採用した中には、十河信二も含まれており、鉄道の道へ進むきっかけをつくりました。

松木幹一郎

日本でも大活躍！

サイクリスト憧れの地 日月潭

日月潭は台湾で有名な観光地の一つで、年間約600万人の観光客が訪れます。湖の北側が太陽（日）の形、南側が月の形をしていましたからその名が付けられました。1周は約33km、周囲の道路はサイクリングやツーリングに適していて、湖では遊覧船も運航しています。



7月18日から
松山—台北便が
就航予定！



世界でも有名なサイクリングロードがある日月潭

台湾と日月潭



台湾電力は今年で
設立100周年



▲現在の水力発電所



▲工事現場での打ち合わせの様子



▲再建された胸像

タピオカミルクティーが大流行し、日本人の人気旅行先の台湾。7月には松山からの直行便も就航し、皆さんにとって身近な海外ではないでしょうか。

その台湾の工業と経済の発展基礎を築いたのが、松木幹一郎。1895年からの約50年間、台湾は日本の統治下にありました。松木は日本政府に求められ台湾電力の社長に就任。台湾最大の湖「日月潭」に当時アジア最大

の水力発電所を築き、台湾全土へ電気を供給することが急務でした。しかし、第一次世界大戦や関東大震災によって資金が調達できず、工事は中断。松木は、権威ある専門家を集め、徹底的に再調査を行い、工事計画を見直しました。資金調達に駆け回り、台湾総督府などと交渉を続け、海外からも借金をして、工事を再開。その結果、第一・第二水力発電所を完成させ、台湾

全土が電化しました。

現在、第一水力発電所は大観

発電所と名前を変え、建設当時

と変わらずに運転を続けていま

す。

月潭のほとりに建てられました。

胸像は惜しくも戦争で徴用され、

台座だけが残っていましたが、

2010年に台湾の人々によっ

て再建されました。

月潭のほとりに建てられました。

胸像は惜しくも戦争で徴用され、

台座だけが残っていましたが、

皆さんご存じの日本一の高層ビル「あべのハルカス」は、近鉄のグループ会社の建物です。その開業の63年前、佐伯勇は、1951～73年に近鉄で初の生え抜き社長を務め、同社の礎を築きました。

大阪電気軌道に入社した佐伯は、車掌や運転士など鉄道の現場を経験したのち、庶務課長や秘書課長などを歴任。当時の社長・種田虎雄の考え方を身に受けながら、種田を直接支える立場で頭角を表しました。結果、48歳の若さで社長に就任。

世界初の2階建て電車・ビスタカーを導入や、近鉄タクシー、年中無休のドラッグストア（コンビニエンスストアの原型）など数々の事業を実現。ほかにも近畿日本ツーリストなどグループ中核企業の発展や、伊勢志摩を一大観光地として開発するなど多くの功績を残しました。

近鉄は天皇陛下をはじめ、多くの皇族の方がご乗車され、佐



▲昭和天皇を先導（右）

近鉄の礎を築いた佐伯



▲世界初の2階建て電車・ビスタカー

伯は名古屋～宇治山田間のお召し列車ご乗車の際に先導も務めました。今年、退位に伴う儀式のために上皇上皇后両陛下が伊勢神宮をご訪問。その際、志摩特急「しまかぜ」で移動されたものは、現在にもつながるものです。鉄道を中心により良いサービスを提供するため日々新しいことに挑戦する心は今もなお近鉄グループの中に生きています。

佐伯が近鉄に勤めていたころ、近鉄の路線は大阪～中川までが広軌で、名古屋方面へは狭軌の車両への乗り換えが必要であつたため、狭軌から広軌へのゲージ（レールの幅）統一を進めていました。

ゲージ統一実行の前年、近鉄が大打撃を受けたのが伊勢湾台風。実態を視察した佐伯は、頭を悩ませた結果、復旧工事とゲージ統一と一緒に実行しようと決断します。佐伯の中で実行案は決まっていましたが、佐伯は独断専行を嫌っており、決断の前には必ずあらゆる知恵を集め、調査や研究を行っていました。

今回も同様で、自分が案を出したら社員が協力しないことを見越し、社員と共に全力で調査することでの、会社全体の士気を上げたのち、実行への決断を下しました。これこそが佐伯が経営信条として掲げていた「独裁はするが独断はしない」ということです。もちろん大変な工事でしたが、約80kmの中川～名古屋

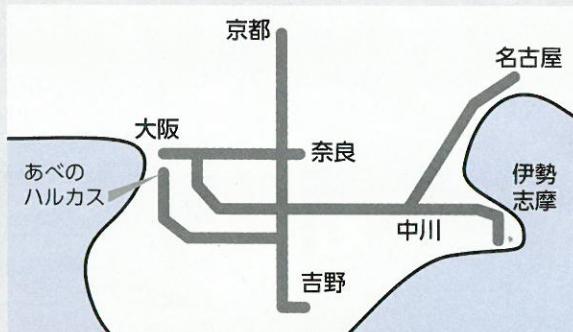
災害復旧
ゲージ統一

伊勢湾台風にもめげず

間をわずか9日間で完成させ、近鉄は直通特急での大阪～名古屋間の移動を実現させました。

近鉄は直通特急での大阪～名古屋間に就任。30年以上、チームの強化とパ・リーグ繁栄に情熱を傾けました。野球の発展に大きく寄与した功績をたたえられ、野球殿堂入りを果たしました。

近鉄の主な路線



郷土への強い気持ち

佐伯は生まれ故郷の丹原をこよなく愛し、丹原に郷土資料館を寄贈したほか、就学援助を行うため、2億5千万円を原資として、(公財)佐伯記念育英会を設立。郷土発の人材育成のための就学援助は、現在でも続いている。



▲資料館設立時、落成式に参加した佐伯

故佐伯氏が殿堂入り

65人目の特別表彰

共同通信配信
愛媛新聞社提供

近鉄にプロ野球球団近鉄パルズ（のちのバファローズ）が誕生したとき、佐伯はオーナーに就任。30年以上、チームの強化とパ・リーグ繁栄に情熱を傾けました。野球の発展に大きく寄与した功績をたたえられ、野球殿堂入りを果たしました。

プロ野球界にも貢献

2人の間の鉄道 そして十河信二

松木と佐伯、この2人には、西条ゆかりの偉人「新幹線生みの親」である十河信二が関係していました。3人は日本の鉄道の歴史の中で、直接ないしは間接的に関係を取り結び、それが数多くの功績を残しました。

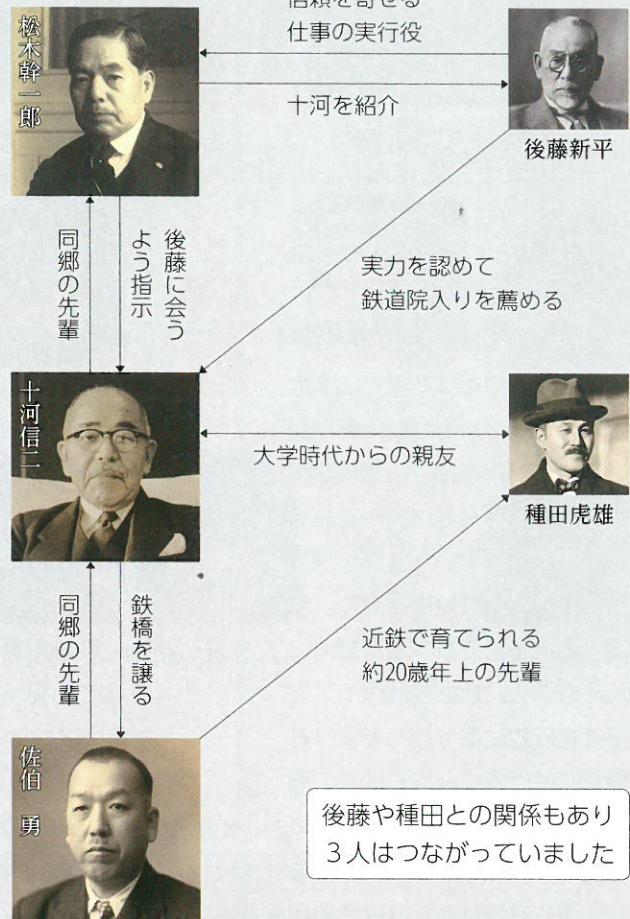
松木は、鉄道院に勤めていたころ同郷の後輩である十河の才能を見い出し、後藤に紹介しました。この紹介がきっかけで、後藤に認められた十河は鉄道院に入り、のちに鉄道界で活躍します。また後藤、松木、十河が

特に連携を強めたのは、関東大震災の復興事業のとき。後藤は総裁として、壮大な規模の復興計画案を打ち出しました。松木や十河らは後藤の計画案に反対する消極派とぶつかりながらも実現に向け尽力します。最終的に計画は実現できませんでしたが、可能な限り復興されたインフラは現在の東京の骨格を担っています。

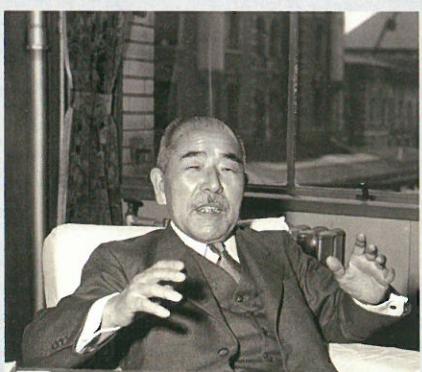
一方、佐伯にとって十河は先輩。佐伯が近鉄の社長になった際、長良川（岐阜県）に新しい鉄橋を作ろうとしていました。その鉄橋は十河が総裁を務める日本国有鉄道（以下、国鉄）が基礎部分を作つて放置していく、以前から近鉄は譲つてほしいと依頼していましたが、国鉄の承認は得られませんでした。そこで佐伯は「使わないなら利用させてほしい」と十河の元へ乗り込んで直談判を行い、譲渡の了承を取り付けました。この佐伯の行動は、近鉄の広軌へのゲージ統一実現において大きな一步となりました。

最も困難で最重要課題であつたのが、「夢の超特急」東海道新幹線の建設。この課題に対し、国鉄ではさまざまな議論が

相関図



実現へ諦めなかつた十河



行われ、最終的には国家的課題として、政府指示の形で国鉄が実行。500kmにも及ぶ距離を新しい標準軌の線路で一挙開業させたという巨大事業は、日本の鉄道史上で経験のないものでした。予算を想定金額の半分に圧縮し、国会を欺いて予算を通すなどして国鉄を牽引し、後藤や種田との関係もあり3人はつながっていました。

東京帝大卒業後は鉄道院に入り、61歳のときに西条市長を務めた十河信二。71歳のときに「線路を枕に討死する覚悟」という、強い意志を持って、国鉄の総裁を引き受けました。就任前、国鉄では大事故が続き、信

用は地に落ちていた状態。そんなときに年老いて就任した十河には「博物館から引っ張り出された古機関車」との酷評もありました。



▲新幹線の建設を実現させた十河（中央）

それぞれの偉人について詳しく
知る方にも伺ってみました。

私にとっての偉人



十河信二

ゆうご
玉井勇伍さん

西条高校2年生。地域・歴史研究部に所属し十河信二について学ぶ。

小さいころから鉄道に興味があった私。新幹線開通という大きなことを成し遂げた人物が西条高校出身だと知り、こんな偉大な人物をみんなに知りたいという思いから、十河さんについて学び始めました。十河さんを一言で表すと、絶対に諦めない人。新幹線計画って当初は猛反対にあったんですけど信念を曲げることなく開通に導いたという点から、絶対に諦めないとことや信念を貫き通す大切さを学び、それは今の自分にも生きています。給料をもらわずに西条市長を務めるなど仕事中心の人なのかなと思っていましたが、家族もとても大切にしていたことを知り、少し驚きました。



佐伯
勇

のりたけ
神崎宣武さん

民俗学者。調査・研究を行い著書「佐伯勇の生涯」を出版。

いかにも日本的とされる「会社主義」が、この時代の人にはあり、佐伯さんは特にそれに忠実でした。戦後の日本の経済復興とその後の経済成長は、こうした人たちによってなされたということを改めて教えられました。良い意味で「小心」でもあったと思います。伊予の風土がそうさせたのかもしれないですね。鉄道とその関連業務以外には、例えば海洋レジャー業などの誘いがあつても決して進出しませんでした。「分をわきまえて」と言い換えても良いかもしれません。それが結果として「近鉄中興の祖」としての存在を示したのだと思います。実際にお目にかかり、お話を聞きたかったです。



松木幹一郎

つたき
松木傳樹さん

河原津出身。地元の歴史研究会で松木幹一郎について学んだ。

今では考えられないくらい、生粋のエリートで相当な実力の持ち主。実力があったからこそ常にトップの人間から仕事を命令され、努力し、数々の功績を残してきました。間違いなく近代化する日本のトップグループの1人。「台湾電力の父」と呼ばれていますが、台湾電力は日本が日本のために作ったもの。当時の時代背景からすると、台湾は日本の統治下にあり、台湾を作っていくためには電力が必要だということで、日本政府が彼の力を見越して、社長にしましたのだと思います。功績だけみると、台湾のために尽力したと思われがちですが、彼は日本のために努力したということを忘れてはいけないです。

ふるさとの誇りを知る

偉人の功績をたたえ、後世につなぐためのさまざまな活動を紹介します。



▲十河信二の偉業を紙芝居で読み聞かせ



▲授業で佐伯勇を学ぶ丹原小学校3年生



▲楠河公民館で松木幹一郎に関する講演会

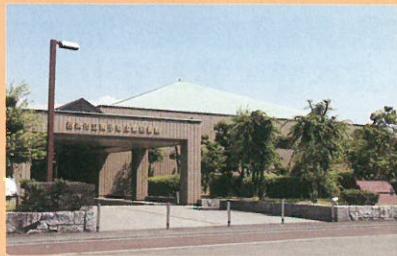
偉人に触れよう！

3人の偉人の資料などを、以下の各施設に展示・所蔵しています。ぜひ足を運んでみませんか。

東予郷土館 (周布427)

TEL0898-65-4797

松木幹一郎に関する資料などを展示。



佐伯記念館・郷土資料館

(丹原町池田1711-1)

TEL0898-68-4610

佐伯勇に関する資料などを展示。



十河信二記念館 (大町798-1)

TEL0897-47-3855

十河信二に関する資料などを展示。



西条図書館 (大町1590)

TEL0897-56-2668

松木幹一郎、佐伯勇、十河信二に関する資料などを所蔵。



つながりっておもしろい！

十河さんを中心に検証活動や資料収集を行っている西条図書館。

安藤副館長に近代の偉人を知る魅力を教えていただきました。



ふみあき
西条図書館副館長 安藤文昭

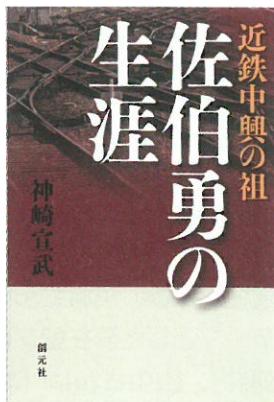


西条・東予・丹原・小松温芳図書館で借りられます。



夢の超特急ひかり号が
走った 十河信二伝
マンガ・文: つだゆみ
監修: 十河光平
協力: 原 朗
西日本出版社

近鉄中興の祖
佐伯勇の生涯
著者: 神崎宣武
創元社



偉人って、教科書の中の存在だと思っていませんか。実は今回紹介した3人のように、私たちの生活や地元に深く根付き、関わっています。そんな人々を知ることは、地元への理解を深めるだけでなく、誇りや愛着心にもつながるものではないでしょうか。例えば日月潭に行つたときに「ここ作った人と私、地元一緒なんよ」なんて自慢できることって素晴らしいですよね。今回紹介できなかつた功績もあります。知れば知るほどその人の生き方や考え方を見えてきて、また違った偉人像が見えてくるかもしれません。

遺したもののはこりに